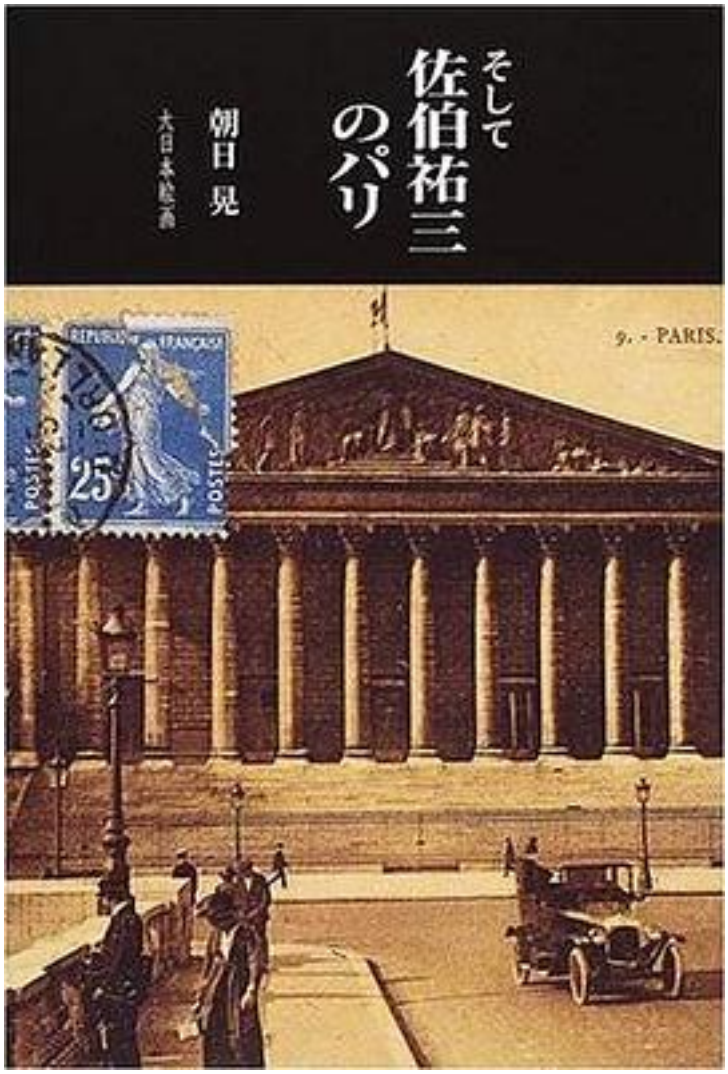
そして、佐伯祐三のパリ



そして、佐伯祐三のパリ_下载链接1_

著者:朝日 晃

出版者:大日本絵画

出版时间:2001/06

装帧:单行本

isbn:9784499201124

30歳でフランスで客死した画家・佐伯祐三。謎の多い彼の生涯を丹念に追い続ける。芹沢光治良、福沢一郎との交流に触れ、新資料を踏まえた、「佐伯祐三のパリ」の続編。

佐伯祐三（さえき ゆうぞう、1898年4月28日 - 1928年8月16日）は、大正〜昭和初期の洋画家。大阪市生まれ。

佐伯は画家としての短い活動期間の大部分をパリで過ごし、フランスで客死した。作品はパリの街角、店先などを独特の荒々しいタッチで描いたものが多い。佐伯の風景画にはモチーフとして文字の登場するものが多く、街角のポスター、看板等の文字を造形要素の一部として取り入れている点が特色である。作品の大半は都市風景だが、人物画、静物画等もある。

佐伯は1898年（明治31年）、大阪市・中津の光徳寺という寺に、男4人女3人のきょうだいの次男として生まれた。1917年（大正6年）上京、小石川（現・文京区）にあった川端画学校に入り、藤島武二に師事する。旧制北野中学（現・大阪府立北野高等学校）を卒業した後、1918年（大正7年）には、東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学し、引き続き藤島武二に師事、1923年（大正12年）に同校を卒業した。東京美術学校では、卒業に際し自画像を描いて母校に寄付することがならわしになっており、佐伯の自画像も現存している。鋭い眼光が印象的なこの自画像は、作風の面では印象派風の穏やかなもので、後のパリ滞在中の佐伯の作風とはかなり異なっている。なお、在学中に結婚した佐伯の妻・米子（旧姓・池田）も絵を描き、二科展などにも入選していた。

佐伯はその後満30歳で死去するまでの6年足らずの画家生活の間、2回パリに滞在し、代表作の多くはパリで描かれている。

第1回のパリ渡航は1924年（大正13年）1月から1926年1月までで、約2年の滞在であった。1924年のある時（初夏とされる）、佐伯はパリ郊外のオーヴェール・シュル・オワーズ（ゴッホの終焉の地として知られる）に、フォーヴィスムの画家モーリス・ド・ヴラマンクを訪ねた。佐伯は持参した自作『裸婦』を見せたところ、ヴラマンクに「このアカデミックめ!」と一蹴され、強いショックを受けたとされる。事実、この頃から佐伯の画風は変化し始める。この第一次滞仏時の作品の多くはパリの街頭風景を描いたもので、ヴラマンクとともにユトリロの影響が明らかである。佐伯はパリに長く滞在することを望んでいたが、彼の健康を案じた家族らの説得に応じ、1926年にいったん日本へ帰国した。

2度目の滞仏はそれから間もない1927年（昭和2年）8月からであり、佐伯はその後ふたたび日本の土を踏むことはなかった。佐伯は旺盛に制作を続けていたが、1928年3月頃より持病の結核が悪化したほか、精神面でも不安定となった。同年8月16日、入院中のセーヌ県立ヴィル・エヴラール精神病院で死去した。

主な作品

「オーヴェールの教会」（1924）（鳥取県立博物館）

「セーヌ河の見える風景」（1924）（東京藝術大学大学美術館）

「パリの寺院」（1924年）（大阪市立美術館）

「パリの裏街」（1924年）（大阪市立美術館）

「レ・ジュ・ド・ノエル」（1925）（和歌山県立近代美術館）

「広告のある門」（1925）（和歌山県立近代美術館）

「リュ・デュ・シャトーの歩道」（1925）（和歌山県立近代美術館）

「ガス灯と広告」（1927）（東京国立近代美術館）

「雪景色」（1927）（東京国立近代美術館）

「オプセルヴァトワール附近」（1927）（和歌山県立近代美術館）

「テラスの広告」（1927）（ブリヂストン美術館）

「裏街の広告」（1927）（京都国立近代美術館）

「リュクサンブール公園」（1927）（田辺市立美術館）

「広告”ヴェルダン”」（1927）（大原美術館）

「郵便配達夫」（1928年）（大阪市立近代美術館建設準備室）

作者介绍:

目录:

そして、佐伯祐三のパリ_下载链接1_

标签

藝術

日文

评论

そして、佐伯祐三のパリ_下载链接1_

书评

そして、佐伯祐三のパリ_下载链接1_